

「洋書の森」主催

翻訳者のためのウィークエンドスキルアップ講座 第18回

# 翻訳の作法

## — 原文に寄り添う —

雨がたくさん降っている場面だからといって、いつも「どしゃ降り」と訳していいのでしょうか。「まっすぐに大きな雨粒が落ちてくる」こともあれば、そこに風が加わって「分厚い水のカーテンがはためく」ように見えることもありますよね。雨の降り方ひとつとっても、書き手は単語ひとつひとつに想いをこめて表現しています。翻訳者の仕事は、それにふさわしい日本語表現を工夫することです。言い換えれば、「原文に寄り添う」こと。原文に書いてあることは書いてあるとおりに、余計な言葉を足したり、勝手に省いたりしてはいけません。そうでなければ、書き手の想いは読者の心に届かないでしょう。

ところが、時間を十分につけられなかったり、読みやすさばかりを優先させたり、はたまた翻訳作業に慣れすぎたりして、いつのまにか原文への敬意がおろそかになっていることも……。今、ドキッとしたあなた——翻訳とはどうあるべきか、今一度立ち止まって考えてみませんか。

今回、そんな翻訳の作法について講義してくださるのは、長年にわたり翻訳界の第一線で活躍する亀井よし子氏です。亀井氏の手がける作品は幅広く、『ブリジット・ジョーンズの日記』シリーズ、『燃える家』（アン・ビーティ）、『ハロルド・フライの思いもよらない巡礼の旅』（レイチェル・ジョイス）をはじめとする文芸書から、『あたりまえだけど、とても大切なこと』といった育児書、『我が父、サリンジャー』などの評伝、さらには翻訳を離れ、絵本のプロデュース（『へいわってすてきだね』）にまでおよびます。いずれにも共通するのが、書き手の想いに寄り添う姿勢。その姿勢を貫いてきたからこそ、翻訳家としての息の長いご活躍があると言えるでしょう。

亀井氏がときに辛口で、ときに愛情たっぷりに語る翻訳論には、初心者はもちろん現役翻訳者も、フィクション翻訳者もノンフィクション翻訳者もハッとさせられるヒントがたっぷり詰まっています。この貴重な機会に、どんなジャンルにも通用する翻訳の作法をしっかりと身に付けておきましょう。なお、席数には限りがございますので、参加申し込みはお早めに。

## ◆ 参加要項 ◆

### 日 時

2015年10月17日（土）15：00～17：00（受付開始14：30）

### 講 師

亀井 よし子 氏（翻訳家）

### 会 場

日本出版クラブ会館・セミナールーム  
（新宿区袋町6番地 都営大江戸線牛込神楽坂駅より徒歩2分）  
<http://www.shuppan-club.jp/>

### 参加費

2,100円

### 定 員

60名（申込順、定員になり次第締切らせていただきます）  
「洋書の森」未会員の皆さまもご参加になれます  
希望者による恒例の交流会（参加費3200円・食事代を含む）を講師同席のもと17：30より、  
会場1Fレストラン・ローズルームにて開催いたします  
参加ご希望の方は同時にお申込みください

### お申込み・お問合せ

お名前・洋書の森会員番号（会員の方）・ご連絡先電話番号、アドレス・参加人数を明記して「10/17(講座のみ or 講座・交流会とも)参加希望」と以下アドレス宛てにE-mailにて送信してください

(財)日本出版クラブ内 「洋書の森」事務局  
E-Mail : [yousho@shuppan-club.jp](mailto:yousho@shuppan-club.jp) TEL 03(3260)5271

## ◆ 講義内容 ◆

- 1) 作品の舞台、時代背景、登場人物の人となりを読みとる。
- 2) 書いてあることを書いてあるように訳す。ストーリーだけでなく、それがどう表現されているかも無視しない。
- 3) 時制をきちんと読みとる。当たり前のように、おろそかにされることも少なくない。ほかに分詞、進行形、助動詞の過去形などの意味。
- 4) 可能な限り文頭から訳してみよう。作者の発想を追いながら。
- 5) 訳文の削ぎ方。冗漫な訳文を作らないために。
- 6) 固有名詞の表記。日本では原則として現地発音主義。思いがけない発音をする人名・地名が意外に多い。

## 亀井よし子 略歴

1964年4月（東京オリンピックの年）、地方の国立大学を卒業して上京。四大卒女子を「試験的」に採用して2年目の某総合商社に入社しました。女子は学歴には関係なく全員が男性社員のアシスタントという時代でした。しかも入社してわかったのは、女子の定年は25歳！ さすがに、それから間もなく労働組合の運動により28歳だか30歳だかまでに延びましたが。

配属されたのは「非鉄金属部地金課」といういかにも硬い字面の課の貴金属を扱う部署でした。伝票を書いたり、通関書類をタイプしたり、もちろんお茶くみをしたりがおもな仕事で、それに特に不満もない、当時としてはごく普通のOL（死語でしょうか？）でした。ところが私の上司というのが、商売センスは抜群で課の稼ぎ頭ながら、5時には定時退社したいという、「モーレッツ社員」という言葉が流行したあの時代の商社員としてはかなりの「変わり者」でした。

貴金属は原産地の政治・経済・労働環境に大きく左右される商品で、現地の業界紙などから情報を集めて翻訳し、顧客に提供するのも担当者の重要な仕事でした。もちろん、それは本来、上司の仕事なのですが、なにしろ相手は5時には帰りたい人です。いきおい、お鉢が私に回ってくることに。そして、それが思いもかけなかった私の翻訳者人生の始まりになりました。

退職後も同じ仕事を任されてほぼ15年。その間に友人・知人を通して、雑誌記事のための資料、科学映画制作の資料としての医学論文、イスラーム教関係の論文などへと仕事の幅が広がっていました。そんなある日、ふと思ったのです。「どうせ翻訳の仕事をするなら、好きな小説を訳せたら楽しいだろうな」と。以来、仕事と家事・育児のあいまの時間をひねりだしては、当時アメリカで活躍し始めていたボビー・アン・メイソン、アン・ビーティなどの、同時代の女性作家の作品を勉強のために訳してみたりするようになりました。同じころ、まだ創設されたばかりの日本翻訳学院（現フェロー・アカデミー）の受講生に、そして4年目から講師になりました。以来、この2月に退くまで、人生の半分以上をフェロー・アカデミーに関わるとともに、40歳を過ぎてからの遅いデビューながら、時代にも恵まれて、文芸翻訳者として100冊あまりのフィクション、ノンフィクションを翻訳して世に紹介することができました。

# おもな訳書

## ◆ フィクション

- 『イン・カントリー』（ボビー・アン・メイソン、ブロンズ新社）  
『ラブ・ライフ』（ボビー・アン・メイソン、草思社）  
『燃える家』（アン・ビーティ、ブロンズ新社、ヴィレッジブックス）  
『貯水池に風が吹く日』（アン・ビーティ、草思社）  
『ウィルの肖像』（アン・ビーティ、草思社）  
『ろくでなしボーン』（ドロシー・アリソン、早川書房）  
『海の向こう側』（メアリー・ゴードン、早川書房）  
『白夜の森』上下（マリアンネ・フレデリクソン、講談社）  
『熱帯産の蝶に関する二、三の覚え書き』（ジョン・マリー、ソニーマガジズ）  
『ブリジット・ジョーンズの日記』（ヘレン・フィールディング、ソニー・マガジズ、角川書店）  
『ブリジット・ジョーンズの日記 きれそうなわたしの12か月』上下（ヘレン・フィールディング、ソニー・マガジズ、角川書店）  
『ブリジット・ジョーンズの日記 恋に仕事に子育てにてんやわんやの12か月』上下（ヘレン・フィールディング、角川書店）  
『カジュアル・ベイカンシー』上下（J・K・ローリング 講談社）  
『ハロルド・フライの思いもよらない巡礼の旅』（レイチェル・ジョイス、講談社）  
ほか

## ◆ ノンフィクション

- 『アメリカの40代』（ローレン・ケスラー、晶文社）  
『目に見えない傷跡 お父さん、戦争のとき何をしたの』（ザビーネ・ライヒェル、晶文社）  
『もし赤ちゃんが日記を書いたら』（ダニエル・スターン、草思社）  
『五十が怖い』上下（エリカ・ジョング、小学館）  
『アトミック・ハーベスト』（マイケル・ダントーニオ、小学館）  
『我が父サリンジャー』（マーガレット・A・サリンジャー、新潮社）  
『早すぎる夜の訪れ』（ケイ・ジャミソン、新潮社）  
『六十を過ぎて人生には意味があることがわかるようになった』（キャロリン・G・ハイルブラン、メディアファクトリー）  
『人類、月に立つ』上下（アンドルー・チェイキン、NHK出版）  
『ブラックメール 他人に心をあやつられないために』（スーザン・フォワード、NHK出版）  
『忙しいお母さんへの29の手紙』（カトリーナ・ケニソン、講談社）  
ほか

## ◆ 子ども向け、絵本

- 『子どもたちが地球を救う50の方法』（共訳、アースワークス、ブロンズ新社）  
『いつもふたりで』（ジュディス・カー、ブロンズ新社）  
『空のおくりもの 雲をつむぐ少年のおはなし』（マイケル・キャッチプール、アリソン・ジェイ、ブロンズ新社）  
『あたりまえだけど、とても大切なこと』（ロン・クラーク、草思社）  
『みんなのためのルールブック あたりまえだけど、とても大切なこと』（ロン・クラーク、草思社）